

真興（まうみよ）を照らす

(盲)は目のちからを亡くした。すなわち目の見えない。(冥)は暗いまたはかたくらがりとあって向こうからは見えているが、こちからは闇という状態を言うと辞典にある。

母校（弘道小学校）に復学したのは三年生になつたときからであつたからこの間、どのようにしていたのか、とにかくつきつきいろいろな事件が輻湊して起つた時期であつたので私の記憶も全く混乱していて思い出せない。

五つ年下の弟がチブスで死んだ。

母も多忙と心労が重なつて昭和十年の春のはじめに死去した。そんなこんなで混乱の期間にわたしは眼の手術、入院、通院と、なにがなんだか暗闇のなかのような期間であつた。

かかつた眼科の先生は「タケウチ眼科」。

福知山駅の近くで当時先進技術の名の高い優しい先生だった。

「一度くすりで盲目になるが、除々に手を加えて眼がひらくようにする」。

手術開始の日。出石から寺の仕事の忙しい間に母は福知山まで見舞いに来てくれてい

「お薬を注射しても、今日一日は見えている、だから、お母ちゃん。叔父ちゃん伯母ちゃんのお顔をしつかり見て。そこらあたり景色もよく見て覚えて、帰りなさい」。
わたしの頭を撫ぜながら先生が言われた。
「きっと眼が見えるように先生がんばるからね」

病院から叔父の山寺まで4キロばかり。それは秋口の晴れた日であった。市街地を出はずれたところの鎮守の森まで着いたとき例によつて道端の石垣に腰を下ろして一服。おやつなんかをもらったのだろう。

一緒にそこまで来ていた叔父伯母は、先へ出発。親子二人きりにしてやろうという考えだつたのだろうか。それからの道は、母におんぶされて。背中の私に言つたのか母ひとりのつぶやきであつたのか、道中母は繰り返しこんな事を言つた。

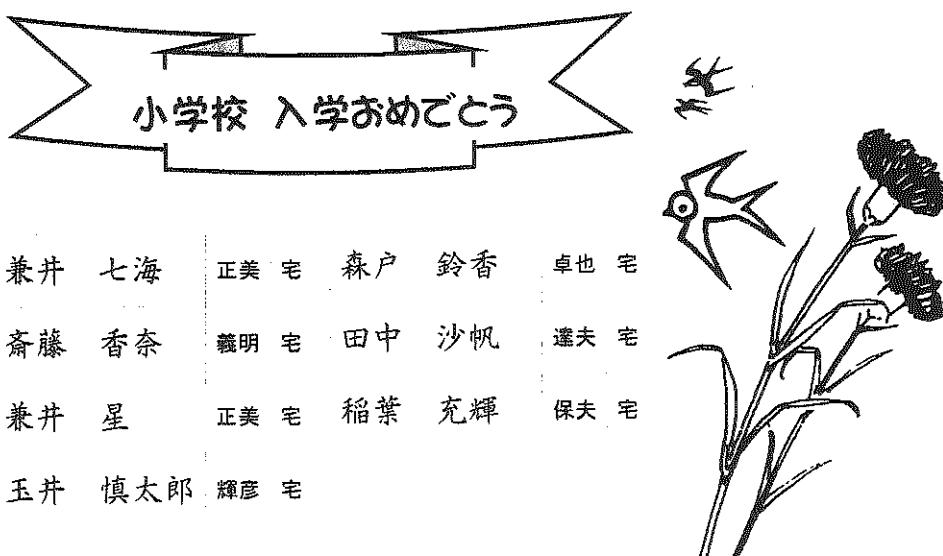
「たとえわたしが先に死んでも、お前は決して一人ぼっちではない。お念佛を申しながらお念佛のなかで母は、如来さまと一緒にお前を手を引いているのだから」（実際に母は翌年の二月三日節分の日に死んだ）

それからもう一つ。母は丁度子守歌のように『正信偈』のあとにあげる『ご和讃』を繰り返えし歌うのであつた。

弥陀成仏のこのかたは
今に十劫を経たまえり
法身の光輪きわもなく
世の盲冥を照らすなり

それがお正信偈のあとのご和讃ということは、毎朝母と一緒にとなえていたから分かった。だがなぜこのご和讃なのかはずっと後になるまで解せなかつた。

『盲冥』なのだ。この子は一生盲目になるかもしれない。いやだとえ眼はひらいても心の眼はなかなか開けまい。永遠の昔から「めくら」のように苦惱の闇の世をさまよつて生きる者のために、そのもののために照らし呼びつづける南無阿弥陀仏の如来様。そのみ光りのなかでどうか健やかに生きて行つてほしい今言つてもこの幼い子には通じまいが、めしいたまま生きていかねばならぬ子への母の満腔のおもいをこめて歌つたのだろう。



兼井	七海	正美	宅	森戸	鈴香	卓也	宅
斎藤	香奈	義明	宅	田中	沙帆	達夫	宅
兼井	星	正美	宅	稻葉	充輝	保夫	宅
玉井	慎太郎	輝彦	宅				

その母の命田は
昭和十年二月三日 享年三十八歳

（如來さまが願いかなつて不可思議光仏とう光のほとけさまとなつてくださつて以来、い無限の時間、今日まで、絶え間なく、その慈悲の光で、くまなく暇も無く、この世界の真実が見えずに闇にさまようあなたたちを、照らし続けていてくださるのです）

一 日 (日)	專福寺 永代經法要
三 日 (火)	坂本 智宅 一三回忌
八 日 (日)	山田弘之宅 忌明法要
一四日 (土)	田村哲夫宅 忌明法要
一四日 (土)	組内会 (正福寺)

歳をとるに従つて、母のこの教えの声が聞こえて来る。

五月 勝林寺 予定

實行委員會

二六日(木)	みのりを聞く会	七時半より
二八日(土)	森井俊之宅	七回忌
一八日(土)	出石組親鸞聖人七五〇大遠忌法要	

・ 猛 (ばく)

麒麟 (きりん) とならんで中国の想像上の動物。

麒麟は聖人・偉人が現れる前触れに現れるときされるめでたい生きもので、日本ではクリンピールのレッテルとしておなじみのもの。

一方獣 (獏) に逢いたければお寺にお参りしてください。

寺の本堂。正面の入り口。ここを向拝 (ごはい) という。その両側の柱の上にこの「獏」の彫刻がある。

体型は熊。鼻は象。目は犀 (き)。尻尾は牛。脚は虎。毛は黑白のままだ。頭は小さく。この獏は人の「夢」を食べるのだそうだ。

こんな奇妙な動物がなんで寺の入り口にいるのだろう。

来、竜樹菩薩天親菩薩と伝わる「淨土念佛」の教えを中国に伝え広めた浄土教の第三祖にあたる方で仏教だけでなく当時中国に流行の「道教」にも造詣ぶかい人でした。

親鸞さまはこの方に帰依なさって「鸞」の字を一字もらつて自分の名のりとしたほどです。

その墨鸞さまの書物のなかにわたしたち「人間」の生きるすがたを表現した

『長寢大夢』

長い一生、自分に対して大きな夢のなかで暮らしている、それがお互い人間の生きさま。

「やろうと思えばなんでも出来るんだ」

「できないのは、人がそうさせたから」

「時代のせいだ」「受けた教育のせい」

「社会がそうさせたから」

やればできるんだ! 自負 自信 ナルシズム 自己陶酔:

しかもこの自信。人との比較において成り立っている。「あいつよりも私は!」。人を見下す差別し虐げることがその根っこにある。

その自分に気づきなさい。道元さまは「自己を習え」と言う。そして自己を忘れ放下せよと仏教は教えているのだとと言う。こに目をひらけとよびかける声が弥陀の本願の南無阿弥陀仏の念仏の声。それが釈迦一代の教え。

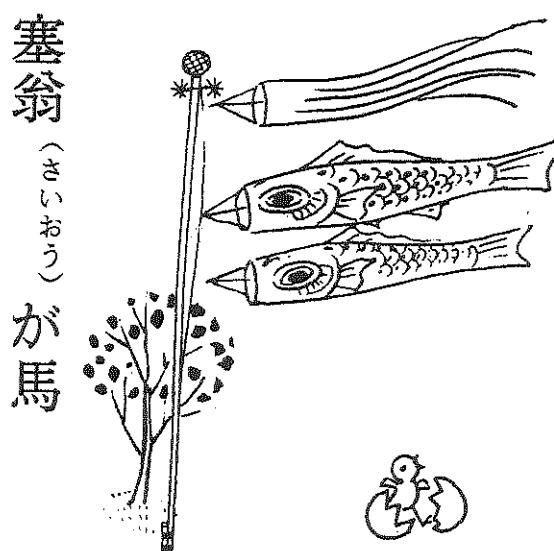
この如来のご本願に呼び覚まされないかぎり、自力心、自己への執着心をはなれて、人生造悪の凡夫が、こころおだやかな净土に参ることはできないと示してくれるのがあります。この獏の彫刻と学んでください。

それから一年。胡の異民族が大舉国境を越えて攻め込んできた。砦付近の若者は防戦にかけとならぬともかぎりません」。馬して足や脇腹に大ヶガをした。人々、「などご不幸なことで」とお悔やみを言つた。老人いわく、「これがまた、しあわせのきっか」とならぬともかぎりません」。

怪我のおかげで老人の家族は無事ですみましたとサ。

世界中、どこの国にも、この見定めができるで困っている。日本。「禍福はあざなえる縄の如し」エストニア「幸福と不幸とは手をつないでいる」ドイツ「幸福と不幸は同じ棒の上をさまよう」ロシア「幸せと悲しみは同じソリに乗つてくる」

問題は、幸・不幸を感じる主体の問題である。何が幸やら不幸やら。



塞翁 (さいおう) が馬

中国の漢の時代、『淮南子 (えんし)』(二十一巻) といふ古典に次のような有名な話がのっている。

北のはし、国境防衛の「塞 (とりで)」に守備の翁 (老) が住んでいた。この方はいろいろな技能にすぐれた人であった。

飼っていた馬が突然逃げて、国境を越えて胡の国に行ってしまった。周囲の人達は「な

んとお氣の毒なことで!」とお見舞いをいった。ところが老人は「いえいえ、この不幸、いつなんどき幸せにならぬともかぎりませんから」。

案の定、それから数ヶ月たったある日、この逃亡した馬が、なんと胡のくにの駿馬 (駿馬) を数頭ひき連れて帰ってきたではないか。

人はみんな「なんとマーお幸せなことで」とお祝いを言った。ところがこの老人。「いいえ、これがまた予想もしない禍いの種に

勝林寺 納骨研修旅行

ご案内

京都西本願寺 長良川温泉・江ゆかりの地の旅

今年も、納骨研修旅行にみんなで参加しましょう。

旅行日程 : 平成23年6月4日(土曜)~5日(日曜)

行程 : 6月4日

勝林寺→京都・西本願寺に参拝

親鸞聖人750回大遠忌法要(法要ナシ)

本願寺周辺

門前町エリア等をゆっくり参拝します

→西大谷本廟で納骨、参拝

→長良川温泉(泊)

6月5日

お宿→江ゆかりのち 岐阜城→関ヶ原

長浜 →勝林寺へ帰ります。

参加費 : 男性 33,000円

女性 30,000円

毎日1度はお仏壇
月に1回お寺参り

年に1度の本山参り